

# 平成22年度 【 学園研究費助成金<B> 】 研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

フリガナ シバタ アヤコ  
氏名 柴田 亜矢子

研究期間 平成22年度

研究課題名 国際言語としての現代英語

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	柴田亜矢子	国際コミュニケーション	講師
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等

本研究は、現代社会における英語について日本人英語学習者に考えさせることによって、日本人英語学習者を「アクティブ・イングリッシュ・オーナー」へと育成するための教育カリキュラムを設立することを目的とする。英語を学習している日本人大学生は、「英語はネイティブスピーカーのことば」という認識を現在でも持っている。しかしその現状は、そんなに単純なものではない。現代社会における複雑な英語の機能と形式を理解し、それによって彼ら自身が国際言語のオーナーであるという自覚を育成することが、今後の英語教育には不可欠である。本研究は、これら2点を柱にした教育カリキュラムを設立する第一段階と捉える。

## 2. 研究方法等

本研究は、現代英語教育カリキュラムの理論的枠組みの構築と教育コンテンツの完成で構成される。

1. 教育カリキュラムの理論構築に関しては、関連分野からの文献を調査し、新たに枠組みを確立する。
2. 実際にコンテンツを提示し、学習者のフィードバックを観察し、分析する。
3. 分析した内容をまとめ、カリキュラムの改善に役立てる。

### 3. 研究成果の概要

#### 1. 教育カリキュラムの理論および枠組みの構築

教育カリキュラムの枠組みに関しては、1980年代からイギリスで始まった language awareness の理論を基礎的枠組みとして設定した。この理論は、「ことばとは何か」という問題を学習者に提示することによって、ことばと社会の関係性やことばがもつ社会的な力、ことばと文化の関係、言語学習と社会などを学習者に考えさせることを可能とする。この理論に関する文献調査を行い、本研究の教育カリキュラムに応用した。

ここで応用したのは、Hawkins (1984), van Lier (1995), Young and Helot (2003)である (大学紀要論文 Shibata 2011 参照)。これらはそれぞれ、ことばそのものへの「きづき」、ことばと社会の力関係への「きづき」、そして経験的な多文化・多言語現象への「きづき」を促進するものであり、本研究の枠組みに当てはまる。これらの理論を軸として、独自のプログラム構築をめざした。

#### 2. コンテンツの提示と学習者のフィードバック分析

現代英語カリキュラムのコンテンツは、上記の枠組みをベースに4部分で構成された：(1) 英語の歴史；(2) 日本の英語教育；(3) 日本社会における英語の役割；(4) 国際英語オーナーとは、である。

コンテンツはすべてパワーポイントスライドにまとめられている。これらは、eラーニング教材として応用できるように作成されている (今後の展望を参照)。

学習者からのフィードバックは、各授業のディスカッションと小論文によって収集、分類された。

学習者からのフィードバックは、毎授業後に集められた。授業開始前のアンケートではほとんどの学生が「英語はアメリカ人やイギリス人といったネイティブスピーカーの言語」と答えていたのが、授業の最後には「ノンネイティブスピーカーでも、日本語のオーナーになることができる」と変化している。これは、本カリキュラムが学生に英語オーナーシップへの認識を与えたことを示していると言える。

### 4. キーワード

① Contemporary English	② Ownership of English	③ Language awareness	④ ELF (English as a Lingua Franca)
⑤ Sensitisation	⑥	⑦	⑧

**5. 研究成果及び今後の展望** (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

今回の研究成果は、いかにまとめられた。

Shibata, A. (2011) Rethinking the Ownership of English as a Lingua Franca: Sensitisation of Contemporary English for Japanese University Students. 椋山女学園大学研究論集第 42 号.

今後は、継続してコース内容を充実させるとともに、eラーニング教材の開発と国際学会での発表をめざす。